
FAIRY TAIL ~ 妖精の化物 《フェアリーオブモンスター》 ~

天翔る墮天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRY TAIL ～妖精の化物フェアリーオブモンスター～

【Nコード】

N4563Z

【作者名】

天翔る墮天使

【あらすじ】

ある日、俺は大学から帰ってきて直ぐに昼寝をしていたはずだった。目が覚めたらそこには神様が座っていた。神様のミスで死んでしまったために、俺は他の世界に転生してそこそこ暴れます。

作者はかなりの初心者です。

駄文や、少ない戦闘描写は多めに見て下さい。

く プロローグ的な く (前書き)

どうも、天翔る墮天使です。(キリッ?)

今回が始めての投稿になるので、暖かく見守ってください。(く)

く)

では、どござよろしくお願いします。

く プロローグ的な く

目を覚ますとそこは白をモチーフにした落ち着いた感じの部屋だった。

俺

「見覚えのない天井だ。」

よし、間違えたからもう一回言い直すか。

俺

「見覚えのない天井だ。」

さて、こういう場面にはこんな感じのお約束がある筈だ。

確か俺は、大学から普通に帰って来てすぐに睡眠をとっていたのに、何故か起きたらこの部屋にいた。

少し警戒しながら辺りを見回すと、色々な家具が数点、観葉植物が2つ、そしていかにも神様のような感じがする、白いローブを着た男の子が1人椅子に座っている。

俺

「どゆこと〜。」

「じゃあ送るよ」？？？？？？？？？？？
？？？？？ふう、オマケとして、1個目の願い事には触る
だけで成分とか、色々と理解が出来るようにしたいから」
「あとこれが、さっき言ってた、お薬だよ」つ薬

俺

「ありがとう」

神様

「じゃあ、そろそろ【FAIRY TAIL】の世界に、行ってもらいます。それとこれを、落とさないで持っててね。」

そして何かを渡してきた、これは？？？？？
携帯電話？

神様

「じゃっ？？？？？行ってら」ガチャン

パカッ

俺

「えっ？」

ヒューーーーーー

俺

「ッ
神様
あっ
」

「俺SideOut」

く プロローグ的な く (後書き)

如何でしたか? (((; 。) ()))

かなり心配ですが、読者様の感想や、厳しい指摘を待っております。

今回は主人公の詳しい能力を書いていきます。

ではまた会う日まで (. . .) ノシ

BY天翔る墮天使より。

主人公の説明や、細かい能力の説明（前書き）

どうも、天翔る墮天使です（キリッ！
今回はオリ主の能力説明なんですが、かなり長いのでザックリと軽く見て下さい。

ではどうぞ（、、、）ノ

主人公の説明や、細かい能力の説明

名前 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? アレックス ? マーサー

次回からは、『俺』から『アレックス』と書き換えます。

性別 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 男性

一人称 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 俺

容姿

【服装】 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 革ジャン〔黒〕+フ

ード付きジャンパー〔茶〕+襟付きの長袖シャツ〔白〕+ジーパン

〔青〕+革靴〔黒〕

【目】 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 青色

【髪】 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 茶色

【身長】 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 180センチ

【体重】 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 80キロ

【年齢】 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 22歳

備考

・身長と体重は、自分の現在の状況。(笑)

・年齢は原作に合わせる為に、減らしました。

~~~~~1個目の能力説明~~~~~

アクセラレータ

一方通行のベクトル操作能力。

運動量・熱量・光・電気量etcといった、ありとあらゆるベクトル(向き)を観測し、触れただけで変換する能力。

普段は『反射(ベクトルの反転)』に設定されており、身体の周



「相手の”気配”をより強く感じる力、それが”見聞色”の覇気、これを高めれば視界に入らない敵の位置、その数・・・更には次の瞬間に、相手が何をしようとしているのかを読み取れる。」

「”見えない鎧を着るようなイメージ”を持ち、より固い鎧は必然的に攻撃力にも転じる」  
「実体が無いものに対して、攻撃ができる。この”武装色”の覇気がこの世で唯一の対抗手段であるということ。」  
「この力は武器に伝わせることもできる。」

「相手を威圧する力・・・”霸王色”の覇気・・・！！」  
「この世で大きく名を上げる様な人物は、およそこの力を秘めている事が多い。」  
「ただし、この”霸王色”だけはコントロールはできても鍛え上げる事はできない、”本人の成長でのみ強化する」。

「~~~~~3個目の能力説明~~~~~」  
『Prototype』の、アレックス・マーサーの全能力MAX状態。

変装

?

偽装系

アレックス

?

?

?

ALEX

変装を解いてアレックス本来の姿に戻る。

? ? ? デイスガイス DISGUISE (変装)  
へんそう

あなたが接触した人誰でも吸収し変装出来る能力です。

吸収する事によりその人物の特殊技能、知識、及び外見へのアクセス能力をアレックスに与えます。

【DISGUISE】  
デイスガイス  
CONSUME POWER  
コンスーム パワー

捕食能力

CONSUME BOOST  
コンスーム ブースト

捕食時の体力回復量が増加する。

STEALTH CONSUME  
ステルス コンスーム

「ステルスしながら」

目標が声を上げる前に、速やかに捕食する。

発動するためには、捕食対象を含む周囲のすべてが、アレックスのことを視認していない状態でなければならない。

DISGUISE POWER  
デイスガイス パワー

変装能力

ぼうぎょけい  
防御系

? ? ? アーマードフォーム ARMORED FORM (装甲形態)  
そうちょうけいたい

バイオマスを身体表面に噴出させ、強固な防弾能力を発揮します。

鎧兜の様なこのフォームで体を覆えば、

眼前の敵を粉碎し、最も強力な攻撃でさえ無効にする、止める事の出来ない力を得られます。

ARMORED FORM  
アーマードフォーム

全身を装甲で覆うことにより、全方向からのダメージを軽減し、

ダッシュ時に敵や車両を吹き飛ばし、ダメージを与えることが出来る。

発動中は移動速度が低下し、グライドGLIDEが使用不可能になる。

? ? ? シールドSHIELD (盾)たて

左腕をバイオマスで形成された骨状のシールドに変える事ができる。

「今回は、ご都合主義で両腕でもできるようにしました。」

シールドパワーSHIELDPOWER

前面に盾を形成し、前面からの攻撃を大きく減衰するほか、ダッシュ時に敵を吹き飛ばし、ダメージを与えることができる。防御力はArmoredFormより高い。

発動中にGlideを使うことが出来るため、Combatスキルの奥義BulletDiveを活用できる。

移動速度の低下も発生しないため、機動戦に向いている。

こっげきけい攻撃系

? ? ? ブレイズBLADES (刃)やいば

右腕を一度で5、6人の敵を切る事が出来る骨状のブレードに変える事により、敵を真っ二つに切断する事が出来ます。

「今回は、ご都合主義で両腕でもできるようにしました。」

ブレードBLADE エアAIR スライスSLICE

ブレードを大きく振りかぶり、地面に向かって叩きつける。 下方  
向への追尾性能は高い。

ブレードBLADE フレンジーFRENZY

走りながら左右にブレードを振り回す。 追尾性能はそれほど高くない。

? ? ? クローズ (かぎつめ) CLAWS (鉤爪)

アレックスの手は相手に致命傷を負わせる事の出来る骨状の鉤爪へと変わり、変形後の彼は即死を与える殺人マシンと化します。

クローズ パワー CLAWS POWER

攻撃力は並だが、振りが素早く、少数の人型敵と戦うのに向いているが、

GROUNDSPIKE (スパイク) 以外に目立つた対装甲能力を持っていないのが欠点。

グラウンド スパイク GROUNDSPIKE

地面に腕を突き刺し、離れた地面から棘を噴出させてダメージを与える。

また、上方方向に突き上げる力が強く、対象相手の姿勢を大きく乱すことが可能。

ダンシング スライス DASHINGSLICE

「ダッシュ中」

地面を滑るように移動し、爪で一発だけ薙ぎ払う。 攻撃力はそこそこだが、非常に高い追尾性能を持つため、

敵と交差するように使つと、敵の背面まで回つて斬りつけるような機動を取る。

? ? ? ハンマーフィスト (てつたいけん) HAMMERFIST (鉄槌拳)

数百ポンドものバイオマスの塊を両方の拳に移行させる事により、鋼や人骨すらも粉々に破壊する巨大なハンマーへと変わります。

ハンマーフィスト パワー HAMMERFISTPOWER



攻撃力は高く、攻撃速度はかなり遅めだが、極一部の攻撃以外は範囲攻撃能力を持っており、振り回してるだけで周囲の物を吹き飛ばしまくる。

ノーマルアタックによるコンボは、3段階目の打ち上げ以外は全て範囲攻撃。

ハンマーフィスト  
HAMMERFISTSMAACKDOWN

大きく力を貯めて、地面に向かってハンマーを叩き付ける。

ダメージは見た目ほど強くはないが、非常に広い攻撃範囲を持っため、

周囲を囲まれた状態で威力を発揮する。

ハンマーフィスト  
HAMMERFISTELBOWSLAM

「ジャンプ中」

下方の敵に向かって飛び込み、強烈な肘打ちを繰り返す。

ダメージはそこそこといった感じだが、追尾性能と攻撃範囲はかなり強力。

ハンマートス  
HAMMERTOSS

「ダッシュ中」

ハンマーを突きだしたまま、走行中の勢いを利用して敵に飛びかかる。

ハンマーは敵の懐に入れないと真価を発揮できないため、敵集団に突撃を掛ける時には有効に働く。

? ? ? マッスルマス  
MUSCLEMASS (筋力増強)

アレックスの腕の筋力を増強させ、両腕の力の焦点を合わせる事で敵により大きなダメージを与えられます。

マッスルマス  
MUSCLEMASSPOWER

素手状態の攻撃ダメージを強化。

戦闘中に発揮できる機動性能は全能力中随一。

マッスルマス  
MUSCLE MASS THROW スロー  
Muscle Mass 発動中は、投擲によるダメージと投擲射程を強化する。

? ? ?  
WHIPFIST ウイップ (鞭の腕 むち うで)  
素早く襲いかかる事が出来る非常にシャープな鞭は敵を半分に切り裂き、離れた場所にいる敵を引っ張ります。

「今回は、ご都合主義で両腕でもできるようにしました。」  
WHIPFIST POWER ウイップ ファイストパワー  
横方向への範囲攻撃と、奥行きに対する長射程攻撃に関してはまさにエキスパート。

非力そうな印象とは裏腹に、十分な攻撃力を備えており、驚くほどの射程もある。  
そして威力も高めなので、離れた場所にいる敵に対して有効。  
STREETSWEEPER ストリート スワイパー  
横方向に大きく腕を振るうことで、周囲の敵を両断する。  
これまた、技の印象とは裏腹に威力が高く、敵を一掃するほどの破壊力を持つ。

LONGSHOT GRAB ロングショット グラブ  
腕を伸ばし、遠方の目標を掴む。  
軽い目標は引き寄せ、重目標は自分がその場まで飛んでいく。

視覚感知系 しかくかんちけい  
? ? ?  
THERMAL VISION サーモ ビジョン (熱源視覚 ねつげんしかく)

サーマルビジョンは、あなたの視界が狭くなるリスクと引き換えに、煙で覆い隠された場所や障害物が有る場所での見通しをよく

する事が出来ます。

サーモビジョン  
THERMAL VISION POWER

煙幕効果を遮断したり、感染者を見分けやすくする。

? ? ?  
インファクティブッド  
INFECTED VISION (感染者視覚)

あなたの視覚を変更して、潜行性の感染症が人々に忍び寄るのを検出して下さい。そうする事で、激しい感染を標識の様に際立たせ、ウイルスに汚染された目標を明らかにする事が出来ます。

「今回は、ご都合主義で『ウイルス』 〃 『風邪とかのウイルス』と  
いうことで、ご理解して下さい。」

~~~~~ 『特殊能力』 ~~~~~

ムーブメント
【MOVEMENT】

エア
アップグレード
O AIRUPGRADES
エアダッシュ
AIRDASH

「ダッシュ(空中)」
空中で大きく加速する。 加速度が非常に高いため、Glideと組み合わせると、地上を走るより速く移動できる。

エア
ダッシュダブル
AIRDASHDOUBLE

Doubleで二回までダッシュ可能になる。

エア
ダッシュダブル
BOOST
AIRDASHDOUBLE

「ジャンプ+ダッシュ」

をすると、上方向に向かって大きく飛び上がる。

グライド
GLIDE

「ダッシュ+ジャンプ（空中で）」
両手を広げて滑空状態になることで、より長時間滞空することが出来る。

グライドは空中にいる間は何度でも発動できるため、「エアダッシュ グライド エアダッシュ グライド」

をやることで、ほとんど高度を落とすことなく高速移動をすることが出来る。ただし、飛翔ではなく滑空のため、永遠に飛ぶことは出来ない。

エアリカバリ AIRRECOVERY

「ジャンプ（吹き飛ばされ中に）」
吹き飛ばされた際に身を捻り、素早く通常状態に復帰できる。被迎撃後にダッシュやグライドを使って回避運動を取れるため、文字通り、態勢を立て直すのに有用。

スプリント アップグレード SPRINTUPGRADES ドライブロール DIVEROLL

「ダッシュ（移動中に）」
前転。通常状態で出したい時はダッシュ後すぐ離すと出る。だがこのスキルの真髄は、様々な攻撃をキャンセルできる点だろう。立ち通常はほぼ全てのフォームでキャンセル可能なので敵が振りかぶったのを見てから回避運動が出来るようになる。

スプリント スピード SPRINTSPEED

地上での走行速度が強化される。

ジャンプ アップグレード JUMPUPGRADES ジャンプ アップグレード JUMPUPGRADE

チャージジャンプによる飛距離が伸びる。

ジャンプ高度が上がる「グライドで長時間飛行できる」より高速で

移動できる、という点で。

ウォール ジャンプラッチ
WALL JUMP LATCH

「ジャンプ（壁際で）」

壁を使った三角飛びを、何度でも使用できるようにする。

【SURVIVABILITY】 サバイバルティ

○ クリティカル CRITICAL MASS SUPGRADESグレード マスアップ
アドレナリン ADRENALINE SURGE サージ

アレックスが死亡寸前まで追い詰められると発動する。アレックスは短時間の間、完全な無敵状態となる。

○ ヘルス HEALTH UPGRADE アップグレード

ヘルス HEALTH BOOST ブースト

自動回復能力：小〜中

ヘルス HEALTH 《ヘルス》 BOOST 2 ブースト

自動回復能力：中〜大

○ ヘルス HEALTH REGENERATION リジェネーション
リジェネーション REGENERATE BOOST ブースト

アレックスの体力が一定値以下を切ったとき、体力が自動的に回復するようになる。Boostを重ねていくことで、自動回復可能な体力上限値が高まっていく。

リジェネーション REGENERATE Delay ドレイ

ダメージを受けてから、自動回復が始まるまでの時間を短縮する。

【COMBAT】 コンバート

○ エア AIR

フライングキック
FLYING KICK BOOST

FLYING KICK による射程と威力を強化する。 FLYING KICK は全編通して利用することになるため取得は必須。

フリック
FLIP KICK LAUNCHER 「FLYING KICK が
ヒット中」

FLYING KICK がヒットした瞬間、左足でも敵を蹴り上げる
ことで、追加ダメージを与えると共に、軽量の目標を吹き飛ばす
ことが出来る。

単純に、FLYING KICK を強化できるスキルと考えれば、
取らない理由はない。

フライング
FLYING GELBOW DROP

「壁走り中」

下方向に向かって、肘を突き出したまま落ちる。

ボディーサーフ
BODY SURF

「人間限定」

FLYING KICK の勢いを利用し、飛びかかった相手に乗って
移動する。早い話、FLYING KICK を当てた相手の、前方
にいる敵を巻き込むスキル。

移動距離はちょっと短く、巻き込むことが出来る敵はそんなに多く
ない。

エアスタンプ
AIR STOMP

「空中で」

直下に向かって急降下し、衝撃波を発生させる。キックと違い、全
く追尾無しで直下に降りるため、

もっぱら、攻撃目的よりは急降下するための手段として利用するこ
とが多い。

キャノンボール
CANNONBALL

「空中で」
空中で高速回転しながら、対象に向かって突撃し、対象と周囲の物体を破壊する。

また、対象の間にある軽目標は弾き飛ばしながら移動する。
高威力・範囲効果に加え、貫通効果までついたFlyingKickの上位互換。FlyingKickの後に続けて出すことも可能
なため、空中二段攻撃が可能になる。

フレッツ
BULLETDIVEDROP

「 Glide中に」

直下に向かって急降下し、非常に広い範囲に渡って衝撃波を発生させ、高空から発動することで、威力と攻撃範囲が増す。

MuscleMass発動中なら、さらに威力と攻撃範囲が増す。

スパイクドライバー
SPIKEDRIVER

両手を振りかぶって、対象を地面に叩き付ける。 アッパー エア
コンボの後にしか発動できない特殊なスキル。

エアエフェクト
OAREFFECT

グラウンドサター
GROUNDSHATTER

地面を思いっきりブツ叩き、衝撃で対象を空に吹き飛ばす。

グラインド
GROUNDSHATTERDROP

「空中で」

GroundShatterの空中版。

高空から発動することで、威力と攻撃範囲が増加する。やや緩やか
ではあるが、下方方向に向かって加速する性質がある。

GroundShatterより打ち上げる力が強く、大きな相手


~~~~~4個目と5個目の能力説明~~~~~  
そのままの意味です。

~~~~~特殊アイテム~~~~~

【大きさ】 ? ? ? ? ? ? □ i k ▣ 程の大きさ

【内容量】 ? ? ? ? ? ? 20粒

【オマケ機能】 ? ? ? ? ? ? 1ヶ月おきに、自動で補充される。ただし、20粒以上は増えない。

【入れ物】 ? ? ? ? ? ? □ i k ▣ の入れ物

第000・1話 その後

Side 神

「あ、どうしよ座標少しずれちゃったけど大丈夫かな？」
「????」

「神様、よろしいでしょうか。」
神様

「ん？どつたの秘書さん？」
秘書

「はい、先程の人物に渡した内容で最初に叶えた能力に少々ながら不備がありました。」

「こちらがその不備のあった詳しい内容です。」つ紙
神様

「はい」
秘書

「それと、転生した先の時間が決まっていなかったため、原作突入の7年前しておきました。がよろしかったでしょうか？」
神様

「いよ。じゃあこの事あの人に送ってといてね。」
秘書

「わかりました。」ペコリ

こうして神様の心配事も無くなって、いつもの仕事を始めました。
秘書さんは手紙を転送して、こちらもいつものように仕事を始めました。

Side Out

Sideアレックス

気が付くと穴の中を落ちていた。

清々しい程の笑顔で送られて来たが、ほぼ垂直に落ちてるからメチャメチャ速い。そして最後に神様の口から聞いた、

神様

(「あ」)

が未だに気になっている。

そうしている内に、足下が少し明るくなってきた。俺は、恐る恐る下を見ると出口なのか綺麗な雲一つ無い青い空が見える。

アレックス

「はあ？　？　？　？　？　？　？　？　空？　？　？」

そこを抜けると遙か上空だった。

思考が一旦停止したのは言うまでもないし、しょうがないと思う。

例えば言うと、『パラシュート無しでスカイダイビング』みたいな感じ。

アレックス

「くそおーーーーーまだ落ちるのかよーーーーー！」

少しの思考ですぐ出てきた言葉をだす。

アレックス

「グライド
GLIDE！」

その瞬間、両手を広げる事によって滑空状態になり、より長時間滞空することが出来る技だ。

アレックス

「危ねえ〜？？？ これでもまだましだな。けど空を飛ぶ為の能力が使えなかつたら間違いなく危険だったな？？？」

安心感に浸っていると、またスピード上がっていき斜め下に落ちていく。この技は『飛翔』ではなく『滑空』のため、永遠に飛ぶことは出来ない。

だいぶ離れた所に落とされたらしく、いくつかの町や村が森の奥にチラチラ見えたが、どれがマグノリアなのか分からなかった。

けれど、自分が貰った能力の確認をしたいため、近場の森の湖の近くに降りる事にした。

湖に向かいながら、アレックスは「自然落下 エアダッシュ グライド 自然落下 エアダッシュ グライド 自然落下 エアダッシュ グライド 自然落下」をやること

で、
地上から約40m上空から地面に飛び降りた。この位の高さなら平
気らしい。そして、アレックスは目の前の湖を覗いてみるとその姿
は？？？？？？

アレックス

「完璧にアレックス？ マーサーだな？？？？？
少し幼い感じだけだ。」

その姿は、『Prototype』にでてくる、アレックス・マー
サーだった。しかし、なぜ自分が幼くなっているのだろうと思って
いたらさきに、神様から貰った携帯電話の着信音が鳴った。

確認しようとポケットに手を入れながら近くの切り株に座ると、新
着メールが2件届いていたので先に古い方を読んでみると？？
？？？？

アレックス

「はあっ？」

～～内容～～

これを見てるって事は、空からのダイブは、無事に着いたって事だ
なね。

あとね、落とす場所と、時間がずれちゃってね、今原作よりも7年
前になったんだ。ごめんね。

それと、能力の確認したら、色々と移せてないのが、あつたらしい

から、詳しい事はメールが届くのを待ってね。

by 神様より

アレックス

「? ? ? ? ? ? ? ? ? ?」

「神様はおつちよこちよいwww」ポチポチポチポチ
「よしっ、保存完了!」

そんな感じで1つ目のメールは受け流し、もう1つのメールにはさつきよりも解りやすく書かれていたが、内容が酷かった。

アレックス

「oh ? ? ? ? ? ? ? ?」

~~~~内容~~~~

こんにちは、神様のサポートをする秘書です。単刀直入に言うと、最初に叶えた能力の一部が不具合により使用できません。

~~~~以下の能力が完全に使用できません~~~~

? ベクトル操作による、自動反射能力

? ベクトル操作による、自分の身体能力の向上

~~~~以下の能力は条件付きで使用できます~~~~

? 黒い羽の使用                      使用回数は1日5回が限度。使用時





それと同時に、音を立てて携帯電話は原型をとどめることなく、壊れていき最後は潰れて無くなった。

アレックス

「『Prototype』の能力は大丈夫かな？さつきグライドGLIDE  
はできたけど？？？？？？」

俺はそこで思考切り替えて、能力確認をする事にした。もし何かの手違いで『Prototype』の能力がアップグレードしないとだめならば、完全に死ぬ。というかやばい。  
俺は焦りながらも近くの木に向かって技をだした。

アレックス

「GROUND SPIKE！」サウンドドンッ！ズガガガッ！バシュッ！  
ザクザクザクザク！  
「ジャンプしてからのBLADE AIR SLICE！」ブレード「ダンッ！ヒュン！ゴオオオオッ！ザンッ！」

アレックスの出した技は地面に腕を突き刺し、離れた地面から棘を噴出させてダメージを与える。また、上方向に突き上げる力が強く、対象相手の姿勢を大きく乱すことが可能な能力だ。  
2発目に出した技は、空中でブレードを大きく振りかぶり、地面に向かって叩きつける。下方向への追尾性能はかなり高い。

そのため、目の前に有った木は地面から出た棘によってボロボロの穴だらけになり縦に割れた。



力』と言う名の『狩り』を始める。  
勿論、決めゼリフは？　？　？　？　？

アレックス

「さア、スクラップの時間だ！」

）SideOut　アレックス

第000・1話 その後（後書き）

いかがでしたか？

今回は戦闘シーンがありませんでしたが、技を出す時の擬音が微妙でした。（^ー^；）

そろそろクリスマスの時期ですが、風邪を引かないようにして下さい。（>人<）

それでは、皆さんまた次回！

b y天翔る墮天使より。

第000・2話 ギルドへの勧誘(前書き)

どうも、天翔る墮天使です。  
なんと初の連続投稿！

勢いに乗っていると楽しいです。

ゞ (@ \_ @)ノ

では、どうぞ！



になり、かなり鮮明に観<sup>み</sup>えるようになった。

そして今、その感知能力<sup>センサー</sup>には見覚えは無いが原作に出てたあのマスターと、紅い髪の女の子が俺の自宅に向かってやって来た。

アレックス

「やっと来たか？　？　？　待ちわびたよ。」

距離にして200mをきったところだ。ちよつとイタズラで、霸王色の覇気を軽く1回だけ当ててみる事にした。

＼Side Out　アレックス

＼Side　？？？

＼覇気を当てられる少し前＼

？？？　？　？　？　1

「この町にいるんですか、マスター？」ワクワク！！

？？？　？　？　？　2

「ああ、この先に建っているログハウスに住んでおるようじゃ　？

？　？　？　気になるのか、エルザ？」



最初にマスターが？　？　？　？　いやマスター　？　マカロフは一緒に来たエルザという紅い髪の子と道案内をされながら少し話しをしていた。

エルザ

「はい！なんといってもこの辺りの危険生物を、1人で全部倒したり山に返したりしたと聞きました。

かなりの腕の立つ人物に違いありません！」ワクワク！！

マカロフ

「うむ。確かにこの辺りの危険生物はそれこそ『Sランク』の依頼ほど危険では無いんじやが『Aランク』の依頼にしては、ちと荷が重いからの。」

しかも、この辺りの危険生物をたった1人でとなるとかなりの魔導士じゃろう？　？　？　？　一体どんな奴なんじやい？」

マカロフは、道案内をしてくれている男性に聞いてみた。

男性

「最初、僕達はかなり変わった人だと思いましたよ。5年前にこの町にあの変な猛獣を1人で倒したなんて誰も信じないから、僕を含めた皆が口を揃えて言いましたよ、『じゃあこの辺りの危険生物を全部退治してくれ！！』ってね。

そしたら、ものの5日で退治したんだからびつくりしましたよ。

ましてや急に、『俺は魔法が使えないから建物が直せません。だから皆で町を直しましょう。』<sup>みんな</sup>だなんて言い出したんですよ。」

マカロフ&エルザ

「魔法が使えない？」

男性

「はい。皆が『どうやって倒したの？』って聞いたらあの人は、『威圧した』って言うから皆びっくりしましたよ。」

「あつ、この道の突き当たりがアレックスさんの自宅です。」

そう言うと、男性が指を差した少し狭い一本道の先にまだ新しい感じの家があった。

男性

「では、自分はここで」ペコリ

マカロフ

「ああ。有りがと」スッ

エルザ

「有難うございました。」ペコリ

マカロフ&エルザ

「？ ？ ？ ？ ？」

エルザ

「マスター、魔法を使わずに『威圧』で倒したと聞くと何故か怖く感じるのですが。」

マカロフ

「うむ。どうやら気を引き締めて行くところか。」

そういつて2人はアレックスの自宅に近づいた瞬間、先程の男性が言ったアレックスの『威圧』が2人に当たった。

マカロフ&エルザ

「「「「「「「「」」」」」」」」

エルザ

「マスター今のは？一体どこから？」

マカロフ

「落ち着くんじゃエルザ。多分だろうがこれが先程の男性が言っていた『威圧』じゃろう。」「とりあえず目当ての人物に会うに、行こうではないか。アレックス君にの。」「スタスタ  
エルザ

「はい。」「スタスタ

「 Side Out マカロフ&エルザ

「 Side アレックス

アレックス

「だいぶ焦ってるけど、マカロフさんはどうって事なさそうだな。多分、勧誘だろうから行く支度でもするか？　？　？　？　？　？  
と言っても何も無いけどね。」「

アレックスの自宅には娯楽の類たぐいが一切無いため、俗ぞくにいう『殺風景な家』ともいえる。

しばらくすると家のドアが開き、1人の老人『マスター？ マカロフ』と紅い髪の毛をした、『エルザ？ スカーレット』が入っ

て来た。

マカロフ

「初めまして、わしはフェアリーテイルのマスターをしている、マカロフじゃ。そしてこっちがエルザじゃ。」ペコリ

エルザ

「宜しく。」ペコリ

アレックス

「こちらこそ宜しくお願いします。マスター？ マカロフそれにエルザさん。」スツ

（まさかここでエルザにも合うなんて思わなかったな。）

「申し遅れましたが、俺の名前はアレックス？ マーサー。アレックスと呼んでください」

マカロフ

「アレックスか？？？ おぬしはここで何をしてるんじゃ？」アレックス

「普通に生活してます？？？ 最近は猛獣も出て来なくなり平和になりましたから。」

マカロフ

「ふむ？？？？？ ここには獰猛なA級の怪物ばかりが住み着く森なんじゃったんだが？？？？？ ここ最近でこの森に生息していた危険な猛獣がいなくなつたんじゃ。」

「それで気になって来たんじゃ？？？？？ お主の仕業かの？」

アレックス

「流石ですねマスター？ マカロフ、確かに俺が退治しました。勿論聞いたと思いますが『魔法は使ってない』と言うのは事実です。」

「



## 第000・2話 ギルドへの勧誘（後書き）

いかがでしたか？

登場人物の口調に、違和感があればぜひコメント下さい。

では、また次回！

by天翔る堕天使より。

PS）アレックスはハーレムは基本的にはありません。一途な男なので？？？？？ 12月21日までに『活動報告』へ詳しく書きます。

第000・3話 旅立ち、フェアリーテイルへ（前書き）

どうも、天翔る堕天使です。

今回はアレックスが、ギルドに入ってナツとカ比呂をする話です。

なんと、活動報告についてコメントが書き込まれました。ヽ(@

！(@)ノ

ありがとうございました。

それでは、どうぞ！

### 第000・3話 旅立ち〜フェアリーテイルへ

Side アレックス

アレックス

「じゃあ町の方はよろしくお願いします。もしまた猛獣が出たら、直ぐに駆けつけますから。」

「町の管理や治安も、頼みましたよ皆さん。」

アレックスは町の人達にこの町からでて『マグノリア』にあるギルドに入る事を町の長に伝え、町の人達にも話した。

勿論誰も止めなかった。何せ彼はこの町の恩人でもあったのでここで、自由にさせてあげようという話しが前から出ていたのだ。

アレックス

「皆さん、行ってきます。」

こうしてアレックスは、マカロフとエルザが待っている駅に向かって行った。

Side Out アレックス



Side マカロフ&エルザ

マカロフ

「それにしても、あの青年はちと気になるの。エルザ、お主はどうじゃ？」

エルザ

「マスターもですか？実は私もなんです。何故かあの男からは『魔力』ではない『別の力』が強く感じられます。」

マカロフとエルザは駅のホームにアレックスが来るまでの暇潰しに、2人はアレックスについて話していた。

マカロフ

「うむ、ワシも彼の『力』が見たことがないから、どれ程の強さか知りたいの。」

エルザ

「・・・マスターも知らない『力』となると・・・一体なんでしょう・・・あつ、来ましたよ。」

そんな話をしていると、人混みの中ならアレックスが見えた。その後3人は列車に乗り、『マグノリア』へと向かっている。

勿論、さっきの2人が話していた内容は全部アレックスの耳に聞こえていたの言うまでもない。

Side Out マカロフ&エルザ

Side ギルド内

マカロフ達が駅からおりて『マグノリア』にあるギルド、フェアリーテイルに向かっていとギルド内では………

?????・1

「オイ、クソ炎やんのか、あぁん？」ゴゴゴゴゴ……!

?????・2

「上等じゃねえか、氷野郎。かかって来い！！」ゴゴゴゴツッ！

?????・3

「なんだあ？またグレイとナツが喧嘩してんのか……いつもなら、エルザが止めにはいるのに見当たらねえな。リサーナ、知らないか？」

リサーナ

「確か、今朝からマスターと一緒に『山のふもとにある町に用がある』っていったよミラ姉。」

ハッピー

「あいつ……!」

最初に喧嘩をしていた2人は言うまでも無く、『グレイ・フルバスター』と『ナツ・ドラゲニル』、相変わらず中の悪い2人組だ。つぎに『ミラジェーン』、エルザを気にしている……

ミラ

「なあ〜んだ。てっきりどっかに隠れてるかと思ったぜ。あっはっはっはっ！」（笑）

「……そうでもなかった。彼女はエルザと仲が悪く、まさに『犬猿の仲』ともいえる程の、仲の悪さだった。」

リサーナ

「もう、ミラ姉ったら。」

あっ、ちょうど帰って来たよ。マスター、エルザおかえり〜。あれ？マスター、後ろの人って誰？」

Side Out ギルド内

Side アレックス

アレックス

「ここがギルドですか、なかなかいい所ですねマスター・マカロフ。」

マカロフ

「そうかい？ありがとな。それと呼び方は何でもいいんじゃないが、そ

の呼び方じゃと何か、よそよそしい感じが……」

アレックス

「申し訳ない、では『マスター』でいいですか？」

マカロフ

「うむ、お主はこれからワシらの家族じゃから好きに呼ぶがよい。」

リサーナ

「マスター、エルザがおかえり。あれ？マスター、後ろの人って誰？」

誰かがこちらに気がついたようだ。

アレックス

「こんにちは、お嬢さん。今日からこのギルドに入る事になった、アレックス・マーサーだ。」

『アレックス』と呼んでくれ。」

（この子がリサーナかな。まだエドラスには飛ばされてなかったんだな。）

リサーナ

「こんにちは、アレックスさん。」

ミラ

「宜しくな、アレックス。」

簡単に挨拶をしていると、マカロフの横にいたエルザに気がついたある2人は、さっきまで喧嘩をしていたのにビクビクしながら、肩を組んでエルザと話している。

グレイ

「よ、よおエルザ。き、今日も俺達は仲良しだぜえ。な、なあ。」

ガクガク

ナツ

「あ、あい」ガタガタ

エルザ

「うむ、仲良しはいい事だが時には喧嘩して互いの悪い所を見つめるのもいいぞ。」

ナツ&グレイ

「お、俺達はそんな事（しないぜ。）（するわけねえだろ。）」（苦笑）×2

エルザとの話が終わると、エルザは奥の部屋に向かって行く。それを確認した2人は、安心してその場にしゃがみ込んだ。しばらくして、ナツが俺に気づいたらしく『お前誰だ？』、と言っている感じがした。よく見ると、周りの人が俺に注目している。

マカロフ

「彼はワシらが用のあつた町ようにいた、腕のあるフリーの魔導士じゃ。名前は『アレックス・マーサー』。」

そう言うと、ナツは目を輝かせたりグレイは興味を持ったり、ミラに至っては闘志をむき出しにしていた。マカロフは続けて、

マカロフ



マカロフ

「一回でいいんじゃない。軽くでいいから、やってくれんかのう？」ボソソソ

マカロフが苦虫を潰した顔をしていると、周りからは「マスターが認めるほど強いらしいぞ。」とか「どれ程の実力を持っているんだ？」と、ギャラリーまで増える始末。

……つまり、『闘わないとマズイ状況』という事らしい。

Side Out ギルド内

Side アレックス

マカロフ

「それでは2人共、準備はよいかの？」

ナツ

「早く始めようぜ!!」

審判はマカロフがやるらしい。俺が「手加減してやる。」ってのをナツに持ち掛けたら、「いらねえよそんなもん。」と言われた。

そして、目の前では目をキラキラと輝かせたナツがいる。……  
なんでこんなにつれしそにできるんだ？

周りはギルドのメンバーに囲まれているので直ぐに降参出来ない。

アレックス

「しかたない……」

そんな事をぼやいてから、俺は観念して能力を使う事にした。直ぐに『霸王色の覇気』で相手を『威圧』してもいいが、それだと芸が無いからやめておこう。

アレックス

「マスター」ボソッ

審判のマカロフへナツに聞こえない程の小声で話かける。

マカロフ

「ん？ なんじゃ？」ボソッ

アレックス

「ナツにはどの程の力で相手をすればいいでしょう。」ボソボソ

マカロフ

「ふむ、適当にやればいいのではないか？こう、軽いトレーニング的な感じかろう？」

あ、殺すのは勿論の事じゃが、なしじゃぞ」ボソボソ



まともな情報は得られなかった。というよりさっきまで家族って  
言ってたのに、その家族に対して殺し以外はオツケーなのか？と、  
俺が驚愕していると、

ナツ

「はやくしろよっ!」

対戦相手であるナツが、苛立っているのがわかる位の声を出して  
きた。

アレックス

「分かったからちょっと黙ってる。」

俺はMUSCLE MASSマッスルマスを装備した。

ちなみにこの能力は、素手状態の攻撃ダメージを強化。戦闘中に発  
揮できる機動性能は全能力中随一。

マカロフ

「うんっ？それがお主の能力かの？」

アレックス

「ええ。相手が相手なので、ある程度本気を出さないと色々面倒で  
しょう。」

俺は苦笑して答えるが、

アレックス

「でも本当は、手加減するのが苦手なんですよ。」クスクス  
マカロフ

「……………」

俺の言葉に黙るマカロフ。そのマカロフを尻目に、俺は戦闘体制にはいりナツに話しかける。

アレックス

「ナツ、と言ったな？先に謝っておこう。」

ナツ

「ん？何をだ？」

声をかける俺。ナツは思案顔で首を捻っている。でもこれは先に言っておかなくてはならない。

アレックス

「手加減は、なるべくする。だから……………死ぬなよ？」

その瞬間、俺はARMOREDFORMアーモードフォルムを装着した。周りから驚嘆の声がする。ナツも驚いてるようだが、俺は気にせずナツに話す。

アレックス

「さあ、始めようか？」

準備は万端。俺が両腕を広げながら話かけると、ナツも俺の声で我にかえたのか構えなおす。

マカロフ

「始めっ！！」

マカロフの合図とともに、ナツは大きく息を吸い込んでいる。この技は、確か広範囲にいる敵に対して攻撃するはずだ。  
ナツは周りに関係無く技を出すらしい。

ナツ

「火竜ウの咆哮オオ！！！」

避けることもできるが、避けたら後ろにいる皆に当る。俺はしよ  
うがなく手を前に突き出して、

マカロフ

「っ！？アレックスッ！！！」

ナツの炎が直撃した。マカロフの慌てた声が聞こえるが、俺は『武装色の覇気』で身体の表面を覆っているから少し温かい位だ。確かに、普通に見たら自殺行為だ。

ナツの技の衝撃で、俺の周りに砂塵が巻き上がった。

ナツ

「よし、俺の勝ちだっ！」「ブイ！

ナツは勝ちを確信しているようだ。周りからも「なんだ、弱いじゃないねえか。」との声が聞こえる。

アレックス

「俺も随分なめられたもんだな……」

ナツ

「なっ!？」

俺がつぶやくと同時に、砂埃が晴れていく。そこには無傷でいる俺がいる。

アレックス

「解析終了……ナツ、お前の炎はもう効かない。いや、俺にはもう意味が無い。」

そして俺は先程よりも強く拳を握りながら、

アレックス

「じゃあ……、次はこっちの番だ……なっ!!」

そう言ったと同時に、ナツの懐に飛び込む。もう反撃の隙は与えない。

ナツ

「っ!？」

ナツがそれに気づき、身構えるがもう遅かった。

ナツ

「うわっ!？」

俺はナツの足払い、身体を宙に浮かせた。そしてナツの左肩を押さえて地面に仰向けにする。

ドゴンッ!

こぶしを叩き付けた。先程よりも多い砂埃が宙に舞い上がる。

エルザ



亀裂の入った地面と共に、3つの穴が見えたからだ……

マカロフ

「そこまでっ！ 勝者、アレックス！」

そこに、マカロフの試合終了の合図がかかる。

アレックス

「んっ？」

勝負が終わったのに静かだ。辺りを見渡すと、皆口を空けてこっちをみている。

まさかとは思うが、やりすぎたかな？

俺がそう思っていると、急に周りから、

一同

「「「「「「「「うおおー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」」」」」

」

アレックス

「っ！？」

皆の叫びが響き渡った。





第000・3話 旅立ち〜フェアリーテイルへ（後書き）

いかがでしょうか？

今回はここで終わりましたが、次回はグレイ達がアレックスと勝負をします。

〜活動報告内容の途中結果〜

ミラジエーン・・・2票+1票

第000・4話 礼儀知らずに容赦なし（前書き）

どうも、天翔る堕天使です。

今回は、色々な意味で大変でした。

この話から、キャラクターの視点を書き始めましたが、キャラクターの口調がなかなかうまくいきません。ご意見の方、気軽に書き込んで下さい。

では、どうぞ！

第000・4話 礼儀知らずに容赦なし

Side アレックス

ギルド内では、先程のナツとの戦いでかなり興奮している4人+  
1人がさつきから俺に、『もう1回（俺と）（私と）戦え！』  
と言ってきた。

ちなみに、その人物は先程負けた

ほのうドラゴンスレイヤー  
炎の滅竜魔導士『ナツ』、

こおりぞうけい まどつし  
氷の造形魔導士『グレイ』、

かみなりドラゴンスレイヤー

雷の滅竜魔導士『ラクサス』、

ザ・ナイト

騎士を使う『エルザ』、

テイクオーバー

吸収・サタンソウルを使う『ミラ』だ。

アレックス

「条件付きで良いなら相手をする。良いか？」

ナツ

「おう！早く言え！」

グレイ

「ナツ、お前は負けたんだから諦める。」

ラクサス

「ガキ共の相手はしないで、俺と戦え！！」

エルザ

「少して良いから手合わせを頼む。」

ミラ

「アレックス早くしろ。」

俺はひとまず、こいつ等に『礼儀』をいち早く叩き込みたい。何<sup>ど</sup>処の世界に年上に対してタメ口で話す奴がいるんだ。

エルザを見習って欲しいもんだな。個人的にはミラがタイプなんだが……

アレックス

「まず最初に……ナツ、お前はさっき負けたばかりだから諦める。」

次に裸の君、せめてズボンを履け。パンツだけはさすがにマズイ。それとヘッドホンの君、お前もまだ『ガキ』の部類だ。調子に乗るなよ？

エルザ、1人を相手にしたら休憩させてくれ。それでもいいなら相手をする。

最後にミラ、一応俺は年上だ。せめて敬語で頼め。それに女の子なんだから、その言葉使いはやめなさい。」

俺は言いたかった事を、全て言った。全員の名前は知っていたがあえて言わない。なんでかって？こいつ等には、一から『礼儀』を叩き込みたいからだよ。

そんな事を言っていると、皆が口々に喋り出した。

ナツ

「次は勝つ！だから勝負だ！」ニツ！

グレイ

「だあーっ！しまった！」バタバタ

ラクサス

「ふざけんじゃねえぞ！」バチバチバチッ

エルザ

「ありがとう、アレックス。」ニコッ

ミラ

「わ、わかった。次からは気をつける。」オドオド

アレックス

「よろしい。ナツとヘッドホンの君は……ちょっと黙ってる。」ギンッ！

俺は、霸王色の覇気をナツとラクサスに気絶させる程度に当てた。ナツはすぐに倒れたが、ラクサスは少し耐えた様だ。だが、こちらも倒れた。

アレックス

「これで礼儀知らずとうるさい奴はいなくなったな……んっ？ どうした。」

それを見ていた3人は若干……いや、かなり驚いている。周りにいた人達も「何をしたんだ。」や「ラクサスは負けたのか？」と言っている。

そんな中、1人の人物が口を開いた。

マカロフ

「それはワシ等にしたのや、猛獣を倒したのと同じ『威圧』<sup>いあつ</sup>なのか、アレックス？」

アレックス

「……はい、しかしマスター達にしたのは1割だとすると、2人を気絶させたり猛獣にしたのは2割程の威圧ですので、「心配なく。」ニコッ

「さあ、話とはぶが俺は暇だが、時間が無い。誰から始めるか決めてくれ。決めてないなら上着を着てない君から始めよう。」

グレイ

「お、おう。よろしく頼むぜ。」

そして俺らは、ナツとラクサスを残して、表へと向かう。

勝負の順番は、

- 1・グレイ・フルバスター
- 2・エルザ・スカーレット
- 3・ミラジエーン・ストラウス

Side Out アレックス

Side 3人

グレイ

（ラクサスが一瞬でやられちゃった……勝てるのかな？）

エルザ

（なんだかミラの顔が赤くなってるな……まさかな。それよりもどうやって、アレックスを倒すかな。）

ミラ

(何をしゃがったんだこいつは？急にナツとラクサスを気絶させやがった。しかも、“礼儀が知らないから”って理由でだと?)

(だいたい本気でかからないとまずいな・・・あれっ？そういえば、アレックスと始めて会った時ってタメ口だったよな・・・なんで怒らなかつたんだ?)

(それに、久し振りに“女の子なんだから”、だなんて言われた／＼)

それぞれが色々な事を考えている。

Side Out 3人

Side アレックス

アレックス

「準備はいいか、グレイ。時間が欲しいなら幾らでもやるぞ。まあ、あげるつもりは無いけどな。」

グレイ

「じゃあ聞くなよ！期待しちまったじゃねえか！」

そんな事していると、マカロフが審判をやりだした。何だかんだいって、俺もマカロフも割と楽しんでいる。

そしていつもの事だが、ギルド内にいたほぼ全員がギャラリーと

して集まってきた。

マカロフ

「それでは、始め！」

グレイ

「アイスマイク氷造形・ランス槍騎兵！アイスマイク氷造形・ハンマー大槌兵！」

マカロフの合図と共に、グレイはランス槍騎兵とハンマー大槌兵を繰り出した。おそろくだが、ランス槍騎兵でその場に足止めさせているうちに、ハンマー大槌兵で俺にとどめを刺すつもりだろう。

しかし、実際には自分の得意な技をアレックスに1回でもいいから当てたいだけらしい。

アレックス

「氷の槍とハンマーか……組み合わせは素晴らしい……だが、まあまあだな。」

グレイ

「なにっ？」

アレックス

「ブレイズBLADES&シールドSHIELD！」

Side Out アレックス

Side グレイ



マカロフ

「それでは、始め！」

グレイ

「アイスマイク氷造形……ランス槍騎兵！アイスマイク氷造形……ハンマー大槌兵！」

グレイは、この攻撃を最も得意としている。ランス槍騎兵はかなりのスピードがある為、先制攻撃に向いている。ハンマー大槌兵に至っては、先程のランス槍騎兵よりはスピードは劣るが、威力は申し分ない為追撃として出した。

グレイ

（決まった！）

アレックス

「だが、まあまあだな。」

グレイ

「なにっ？」

アレックス

「フレイズBLADES&シールドSHIELD！」

＼Side Out グレイ

＼Side アレックス



ギルドの中で倒れていたラクサスが目を覚ました。

Side Out アレックス

Side 3人

グレイ

(何にも見えなかった……気づいたら横にいて、喉に突きつけられてた。)

エルザ

(やはり強いな。今回は諦めて、ミラと変わってもらおうとするか。

)「ミラ、順番が変わってくれないか。私は辞退するから、頼む。」

ボソボソ

ミラ

「はあっ?……こ、今回だからな!」ボソボソ

エルザ

「すまない、恩にきる。」ボソッ

(やはり顔が赤いな……もしかして……な?)

ミラ

(ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ!!何だか、ドキドキしてきた!!なんで!?落ち着け私、たかが勝負するだけだろ!?)  
カアーツ

それぞれが特集な思いをしたりしている。

Side Out 3人

Sideアレックス

アレックス

「なかなか面白い技の組み合わせだったぞ、グレイ。だがやるなら槍騎兵ランスをもっと早く打ち出して敵を攪乱させてから、大槌兵ハンマーを相手から見えない位置から当てる事だ。」

「まあ弱い相手とか不意打ちなら、かなり強力なコンボだ。俺でもギリギリで反応できたから、危なかったよ。」

グレイ

「そ、そうなのか。(あの動きは絶対に、強い奴の動きだった。一つ一つに無駄がなかったからな。)」

アレックス

「ああ、後は攻撃後の動きに気をつける。どんなに強い技で『結果』が良くても、技を出すまでの『過程』も大事だからな。」

俺はグレイに簡単なアドバイスをしていると、エルザが俺に近づいて“今回は辞めておく”と言った。つまり次に勝負するのはミラだ。

……なんだか物凄く顔が赤いが、気のせいだろうか。

アレックス

「ミラ、始められるか？それともお前も、エルザみたいに辞めておくか？顔がだいぶ赤いが。」

ミラ

「だっ、大丈夫だっ！／＼／」

マカロフ

「ふっ。・・・では両者準備は良いかの？」

アレックス&ミラ

「「ああ、いいぞ」「」

マカロフ

「それでは、始め！」

マカロフの合図と共に、俺は走りながらMUSCLE MASSマッスルマスを装着した。ミラも、サタンソウルになり両者の『殴り合い』が始まる。

『殴り合い』は始めてだから、見聞色の覇気を使ってミラの攻撃を『探知』し始めたら、ミラの後ろからさっきまで倒れていたラクスが、雷竜奉天劇ひいらぎほうてんげきを繰り出した。

流石にマズイと思い、俺は一旦ミラの右拳を顔の左に受け流し、ミラを左手俺の懐に引き寄せる。そしてミラの後ろから来た攻撃に対して、右腕をSHIELDシールドにして反射を使った。

反射だけでも良かったが、反射だけで確実に返せるか分からなかったから、保険として出した。  
一方通行アクセラレータさんの反射能力、久しぶりに使ったような気がする。

アレックス

「解析終了・・・これで万が一でも安心だな。ミラ、大丈夫か？」

ミラ

「¥( / / / / ) / 「プシューッ  
アレックス

「気絶してる……のかこれは。なんだか幸せそうだが。」

Side Out アレックス

Side ミラ

マカロフ

「それでは、始め！」

私は闇雲に拳をアレックスに突きつけた筈だったが、アレックスはそれを簡単に避けて、私を抱き寄せた。

ミラ

(えっ?なに?アレックスに抱き締められてる?えっ?どうゆうこと?って言うか私アレックスの首に腕まわしてる?)

(うわっ?アレックスの息が首につ?ヤバイヤバイヤバイ?顔が?アレックス?力を込めるな?アレックスの胸に顔が?くあw  
se dr ft g y ふじこ I p?)

(しあわせだー!!!¥( / / / / ) / 「プシュー

\\S\\side  
O r t  
\\S\\

第000・4話 礼儀知らずに容赦なし（後書き）

いかがでしょう？

頑張って続きを書いていきたいですが、軽いスランプです。）、

、y・

でも、諦めません。

今回は、ラクサスへのお仕置き編です。

では、また会う日まで。

b y天翔る堕天使より。



第000・5話 一方的な勝負(前書き)

どうも、天翔る墮天使です。

何とか書けたけど、あまりの駄文にスランプ気味な俺( ;  
)

原作まで後少しなのでテンション上げて頑張ります。

〇( )〇

では、どござー!

第000・5話 一方的な勝負

Side アレックス

アレックス

「ヘッドホン君、これは一体全体どういっつもりなのかな？」ギロリッ！

ラクサス

「ーッ？」ゾクッ！

マカロフ

「ーッ？」ゾクッ！

俺は急に攻撃してきたラクサスに対して『その場から動くな！』の意味を込めた威圧をしてから、マカロフには『皆を近づけるな』の意味を込めた威圧をしたのは、この方が早く伝わるからだ。

2人は理解したか判らないが、ラクサスはその場から動かさずにこっちを見ている。マカロフも察してくれたのか、俺に向かって1度頷き俺とラクサスから、皆を離れさせた。

そんな中、ある2人にマカロフが俺に指を差しながら話していると、2人が駆け足で向かってきた。エルフマンとリサーナだった。恐らくマカロフが頼んだのだろう。

エルフマン

「姉ちゃん！アレックスさん、姉ちゃんは大丈夫ですか！？」

リサーナ

「エルフ兄ちゃん、アレックスさんが守ってくれてたから大丈夫

だよ。」

アレックス

「ああ、大丈夫だ気絶してるだけなんだが・・・やけに顔が赤いんだ。勝負の前からだっただから、もしかしたら風邪なのかもしれない。看病は手伝うから、後は任せてもいいか？」

エルフマン

「はっ、はい!!」(凄く赤い!早く寝かさなきゃ!!)

リサーナ

「わかりました。」(気絶してる割になんだが顔がニヤついてるんだよね。)

ミラ

「(ノノノノ)」「プシュー

俺は気絶してるミラをエルフマンに任せて、リサーナにはすっかり忘れていた『特殊アイテム』を1粒渡して、起きたら飲むように伝えた。

そして俺は怒りが爆発寸前だったが、今を見て反省していれば少し能力を抑えてやろう。と、いった願いを思いながらラクサスにむかって、

アレックス

「さあヘッドホン君、愉快的オブジェになる準備はできてるかな?それともお前は、スクラップにされたいか?」ゴゴゴゴゴゴ!!

Side Out アレックス

Side ラクサス

俺は確かに攻撃したはずだった。俺の技でもかなり強力な、雷竜らいりゅう奉天劇うほうてんげきを繰り出してミラと一緒に倒してやったはずだ。それなのにあいつは簡単に防いだだけでなくて、雷竜奉天劇らいりゅうほうてんげきを俺にそのまま返しやがった。

ラクサス

「どうゆう事だ。」

アレックス

「ヘッドホン君、これは一体全体どういっつもりなのかな？」ギロリッ！

ラクサス

「ーッ？」「ゾクッ！

マカロフ

「ーッ？」「ゾクッ！

あいつは今、何をしやがった？俺が勝負を挑んで気絶した時よりも、かなりヤバイ感じがしやがる。『少しでも動けば貴様の命が無  
いと思え。』とでも言ってるのか？

だが、俺は最強だ！さっきはきつと、まぐれに決まっているはずだ。そうに決まっている！俺に勝てる奴は、このギルドにはいないんだからな。

アレックス

「さあヘッドホン君、愉快的オブジェになる準備はできてるかな？それともお前は、スクラップにされたいか？」ゴゴゴゴゴゴ！！

Side Out ラクサス

Side アレックス

アレックス

（マカロフが周りの人を遠ざけてくれて助かった………これで心置きなく能力が使える。）

「ヘッドホン君、自己紹介でもしようではないか。俺の名前は、

『アレックス・マーサー』。好きに呼んでくれ。君の名前は？」

ラクサス

「黙ってる、化物！自己紹介？そんなもん、どうだっていい！このギルドで最強の俺と戦え！」

アレックス

「……成る程、『原型が留めなくなるまでこの俺を叩いてくれ。』だな、任せておけラクサス。それと俺の異名は『化物』<sup>モンスター</sup>だから、褒め言葉ありがとう。」

俺はラクサスの言葉を自動変換、もしくは自己解釈をした俺は手加減する気はもう微塵も無い。

俺はMUSCLE MASS<sup>マッスルマス</sup>を装着して、武装色の覇気をMAXま

で身に纏わせて構える。

アーマードフォーム

ARMORED FORMも個人的に好きだから装着して、黒い羽も出すがこれは自分の腕に巻き付く感じで纏わせる。

こつちの世界に来て興味本位でやってみたら、時間は掛かったが上手くできた。時間としては30分間使用ができる。回数は20回程だが時々増減する。

アレックス

「実は俺も最凶さいきゆうだから気が合うな。」ニヤリ

ラクサス

「これでも喰らつとけ！鳴り響くは招雷の轟き、天より落ちて灰燼と化せ！レイジングボルト！！」バリバリバリッ！

空中から巨大な雷が俺の頭上目掛けて降ってきた。しかし俺はそれを避けずに右拳で打ち消した。

実際は先程の攻撃で演算をしていたから、ラクサスの雷を空気中に小さく分散させているだけであり、そんな強く殴ってはいない。

アレックス

「それで？何故いきなりミラに攻撃したんだ。運が悪ければ死んでしまっていたかもしれないぞ。」

ラクサス

「うるせえ！大体お前が俺の事を『ガキ』扱いしたからだろ！それにあいつは弱い！なら死んでもかまわん！ハアーツ！」

そう言いながらラクサスは雷を纏って俺に突っ込んできた。そん

なラクサスを俺は右拳で鳩尾を殴った。

ラクサス

「がはっ!？」

突っ込んできたラクサスはその場で倒れそうになるが、俺は襟を掴んで無理矢理立たせる。苦しそうだが構わない。

そのまま俺はアッパーカットをラクサスにかましてからSPスバIKイクドライバーEDRイクドライバーIVERをやった。これは両手を振りかぶって、対象を地面に叩き付ける技。アッパーカットの後に浮かんでいる敵にしかならない。

そして地面に叩きつけて倒れているラクサスにGRグラOUNグDグSHグATドサターTERもかました。これは、地面を思いつきりブツ叩き、衝撃で対象を空に吹き飛ばす技。

アレックス

「これで、フィニッシュだ。FLフライングキックYフINフGフKフICKフ!&FLフリックIPフリックKフリックICKフリックLAランチャーUNランチャーCHランチャーER!ランチャー」

フライングキック  
FLフYフINフGフKフICKフは、ジャンプしてから相手に右足で蹴る技。  
フリック  
FLフIPフKフICKフICKフLAランチャーUNランチャーCHランチャーERはFlyinフgフkiフckフがヒツトした瞬間、左足でも敵を蹴り上げることで、追加ダメージを与え軽量の相手を吹き飛ばす。

ラクサス

「がはあああ！」ズザーーーッ！

ラクサスは、マカロフの近くまで蹴り飛ばされ気絶している。それをみたマカロフ、はラクサスに近づき頷いた。

マカロフ

「うむ。ここまで！勝者、アレックス！」

マスターが左手を挙げ勝利者宣言をすると同時に周りからは、

マカロ

「すげえぞ！あのラクサスを一方的に倒しやがった！」

ワカバ

「嘘だろ！？あのラクサスが新人に負けたのかよ！？」

ナツ

「アレックス、もう1回俺と勝負しろ！」

マカロ&ワカバ

「「やめとけナツ、あのラクサスでさえ負けたんだ。しかもお前は負けたばかりだろ？」」

ナツ

「やってみなきゃわかんねーだろー！なあ、ハッピー？」

ハッピー

「あいつ！」

周りが少しずつだが騒がしくなってきた。恐らくだが、これが普



段のフェアリーテイルだろう。だから仕方が無いんだろうな。そう思っていると、息を荒げながらゆっくり立ち上がるラクサス。

ラクサス

「はあはあ・・・次、戦うときは必ず勝つ！はあはあ・・・覚えておけ！俺が最強だ！」ヨロヨロ

アレックス

「構わん。俺はいつでも挑戦を受ける。だが今はこれを噛み砕いて傷を治しとけ。直ぐに治るはずだ。」つ薬

ラクサス

「クソつたれが！」パシッ！ガリッ！

薬のおかげか、立ちあがるのが大変そうなラクサスだったが、直ぐに立ち上がる事ができたラクサスは、ギルドの中へゆっくり入っていった。

アレックス

「ラクサス、この世界には死んでもいい奴なんていない。ミラもその1人だ。」

ラクサス

「ふんっ。お前は先生か。」

俺は肩を貸しながらラクサスを仮眠室へ運んで寝かせた。ミラは別の部屋で寝ているらしい。顔を出そうとしたが、俺は他のギルドメンバーに背中を押されながら、ギルドの方に言ってしまった。

エルフマンとリサーナがいたので話聞くと、どうやら俺の渡した

薬を飲んだらまた赤くなって寝たと言っていたが、熱は無かったみたいだ。この楽しい宴会が終わり次第、顔を出そうと思っている

Side Out アレックス

第000・5話 一方的な勝負（後書き）

いかがでしょうか？

次回はミラにお見舞いに行く話です。なかなか上手く出来ないの  
で、時間は掛かります。

ではまた次回！

by天翔る堕天使より。

第000・6話 ミラの元へ行くと、アクシデント発生。(前書き)

どうも、天翔る墮天使です。

今年のクリスマスは家族と過ごしました。

来年こそは・・・と、考えていますがまず無理でしょう。  
、( y .

今回はかなり無理矢理感がありますので、暖かい目で見てください。

第000・6話 ミラの元へ行くと、アクシデント発生。

Side アレックス

夜中

俺は、皆が酒を飲みまくって酔い潰れている奴や、机に突っ伏している寝てる奴、床に寝ている奴を一カ所に集めて毛布をかけた。一通りが終わった所でミラのいる病室へと向かった。ミラの病室は、ラクサスよりも奥の部屋だとリサーナから聞いておいた。俺は部屋の扉を開けて中に入った。ミラは気がついたのか、少しだけ動いている。

アレックス

「ミラ、体は大丈夫か？」

ミラ

「ん〜誰？エルフマン？それともリサーナ？」モゾモゾ

アレックス

「アレックスだ。少し良いか？」

ミラ

「ア、アレツーーッ！／＼／＼」ガバツ

アレックス

「シーーッ。声大きい。」

俺がミラの口に手を当てて大きな声をだすのを塞ぐと、窓からの

月の光でミラの顔が赤くなっているのが分かる。

俺は取り敢えずミラに落ち着くように説得したが、最初はなかなか落ち着いてくれず興奮していた。

アレックス

「体の具合はもう大丈夫か？もしまだ辛いようなら出直してくるが？」 ナデナデ

ミラ

「だ、大丈夫だ！お前の薬を飲んだら直ぐに治ったぞ／＼あ、ありがとう／＼」 カアアツ

アレックス

「そうか。お前が無事で良かった・・・だいぶ顔が赤くなってるが本当に大丈夫なのか？」 スツ、ピトツ

俺がミラの顔を撫でると、ミラの顔が赤くなってきた。そこで俺は、両手でミラの顔を支えて俺のオデコにあてた。確かに熱は無いようだが少し熱い気がする。

アレックス

「今は無理しないでゆっくり寝ている。まだ治ってないようだからな・・・大丈夫か？」

ミラ

「¥（／＼／＼）／」 プシュー

俺は取り敢えず、赤くなってしまったミラをベットに戻しておいた。俺は不意に窓の外に目を向けると、そこには神様と綺麗な人が

浮かんでいる……なんですか？

神様は俺に向かって手招きをしていたのでギルドの入口から出て行き、神様の方へ向かった。

アレックス

「何であんたがココに居るんだよ。さっきのが人目についたら、流石にマズインじゃないか？」

神様

「大丈夫だよ。僕達の周りには結界みたいな特殊なものを張り巡らしてるから誰にも見えないよ。」

秘書

「神様、今はそんな事よりもこの男に大事な用件が有るのではないのですか？」

アレックス

「大事な用件？一体なんですか神様？」

俺は全く……いや、恐らくだがまたこの神様が何かしたと考  
えた。何せ俺を『うっかり死なせちゃいました。』みたいな事を言  
ったから、また『うっかりしちやっただろう。』

神様

「じ、実は僕もよく分からないから後は秘書さんに聞いてい  
てね。」ヒュンツ！

アレックス

「……逃げたな。まあ、当たり前か。それで？用件とは何  
ですか。」

秘書

「実は、カクカクシカジカ。」  
アレックス

「まるまるうまうま……マジですか。」

簡単に説明をすると、神様は俺に渡した能力を紙に書いて机の上においていたら、3個目の能力を神様が消してしまっただけ……  
・なんで？

一応神様も悪いと思ったらしく、『埋め合わせる為の能力』+『新しく付け足す能力2個』でチャラにしよう。との事でした。

アレックス

「ならまた同じ能力を選べばいいのでは？」

秘書

「残念ながらそれはできません。他の転生者に試してみましたが、その能力本来の実力が100%だとすると、10%も発揮できませんでした。それでもよければ構いませんが？」

アレックス

「遠慮しておきます。」

どうやらマジでヤバイ。あの3個目の能力は『戦闘にはもってこい』程の力だったのでへこんでいる。だが俺は『Prototy  
pe』の、アレックス・マーサーの全能力MAX状態』並に使える、  
能力を思い出した。

アレックス

「まず最初に消えた1個目の能力は、ワンピースに出てくるCP



9が使用できる六式全てが使用可能。

「  
秘書

「かしこまりました。では後の『新しい能力』の方をお願いします。」「カキカキ

アレックス

「1個目は複数の悪魔の実が使用可能。動物系悪魔の実「ネコネコの実 モデル」<sup>レオバルド</sup>」「動物系悪魔の実「ウシウシの実 モデル」<sup>ソオン</sup>」「動物系悪魔の実「イヌイヌの実 モデル」<sup>ウルフ</sup>」「超人系悪魔の実「ドアドアの実」の能力で。

2個目は、魔法剣の使用が可能。ついでにエルザみたいに服も変えれると嬉しい。」「

秘書

「分かりました。しかし悪魔の实の能力の使用中には一方通行のベクトル操作能力は使用できません。それと、<sup>レオバルド</sup>「豹」と<sup>シロフ</sup>「麒麟」と<sup>ウルフ</sup>「狼」の使用中は「ドアドア」は使用できません。」「カキカキカキアレックス

「わかりました。」「

俺の目の前にいる秘書さんは一通り書き終わったのか、こちらを見てきた。実に綺麗な人だ。例えるなら「大和撫子」+「エロカッコイイ」みたいな感じ。

話は飛んで、また神様みたいに「ミスをしました。」「何て有りませんように。

秘書

「能力は完璧に渡しておきましたので安心して下さい。それと見た目をワンピースに出てくる「カク」に変えておきました。あと、

この世界に『前の貴方』を知っている人物を『今の貴方』にインプットしておきました。」ニコッ

カク

「あ、ああ。すまないの。」

秘書

「詳しい事は次回の投稿で報告します。」

カク

「メタ発言は禁止じゃぞ。」

ワシがお礼を言い終わると同時に秘書さんは、ワシの前から消え去った。取り敢えずミラの元へ行き、ベットの横に椅子を置いて『形だけの看病』をしていた。

〈翌朝〉

ワシは目が覚めると、自分に毛布が掛けられていることに気が付いた。窓の外を見るとだいぶ日が上りはじめている。

ギルドの方は、だいふ騒がしくなっていたので顔を出そうと椅子から立ち上がると、扉が開いて2人が入って来た。

エルフマン

「あ、おはようございます、カクさん。朝まで姉ちゃんの看病をしてくれて有難うございます。」ペコリ

リサーナ

「カク、おはよ。ミラ姉の看病ありがとね。」ニコッ

カク

「ああ、おはよ。ミラの具合はどうじゃ？」

リサーナ

「『もう大丈夫』ってミラ姉が言ったよ。」

ワシは『そうか。』と言ってからエルフマンとリサーナを連れてギルドの方へと向かって行った。どうやら誰も俺が変わった事に気づいていないみたいだ。特に鼻が。

そこでワシは、喧嘩していたナツとグレイを止めたエルザが、今度はミラと喧嘩をし始めたのを見た。

エルザがこっちに気が付いてミラに内緒話をしていると、次第にミラの顔が赤くなっていった。そして、ミラが急に走り出したのを見ていた。

＼Side Out アレックス改めてカク

＼Side エルザ

エルザ

「んっ？またナツとグレイが喧嘩をいているのか。懲りない奴らですね。」

マカロフ

「まったくじゃのう。エルザ、すまんがあのと二人の喧嘩を止めてくれんか？依頼が終わったばかりで悪いんじゃないが。」ポリポリ

エルザ

「わかりました。」スッ

ナツ

「おい、グレイ。邪魔なんだよどけ。」ギロツ

グレイ

「うるせえな、おめえがどけばいいだろうが、ああ!？」ギロツ

ゴツンツ！ゴツンツ！

そんな2人の喧嘩をエルザは死角になっている所から殴りつけて無理矢理だが黙らせた。

ナツ&グレイ

「~~~~ツ！」ジタバタジタバタ！

エルザ

「お前達はまた喧嘩をしていたな。どうしてそんなに仲が悪いんだ？」

グレイ

「な、何を言ってるんだ？お、俺達はいつでも仲良しだぜ？な、なあ。」ガタガタ

ナツ

「も、もちろんだぜ。」プルプル

ナツとグレイとたわいも無い会話をしていると後ろからあいつの声が聞こえた。

ミミ

「よお、エルザ。朝から居ないもんだからてっきり隠れてるかと思っちまったぜ。」

エルザ

「ミラ、私はてっきりまだベットで寝込んで、カクに看病して貰って甘えてるかとおもったよ。」

ミラ

「な、な、な、／／／」カアア！

私がミラにカクの事を話しながら茶化すと、今まで見た事がない位の驚きをし始めた。

そして私はリサーナとエルフマンが、カクを連れて来たのを見つけたのでミラに追い打ちをかけた。

エルザ

「ほら、後ろにいるカクが心配そうにお前を見ているぞ。」ボソッ

ミラ

「¥／／／／」ダッシュユ！

私がミラに内緒話をすると、顔を真っ赤にさせながら走って行った……どうやらかなり照れてるようだ。

＼Side Out エルザ

＼Side カク

カク

「ミラはどうしたんじゃ？あんなに慌てて何か用事でも有るのか？」

エルフマン

「いえ、今日は日曜日なので予定は無いはずですが……リサーナ、何か聞いてる？」

リサーナ

「私も聞いてないよ。」

ワシはさっまで話していたエルザに話を聞くと、『さあ？』と言われた。その後、ワシがミラに会う度にミラは顔を赤くしている。

第000・6話 ミラの元へ行くと、アクシデント発生。(後書き)

途中で予告があったように主人公の能力を次回報告します。

え、何で能力変えたかと?ご都合主義ですから(笑)

実際は『プロトタイプ』のゲームがそこまで知らないからです。  
いません。m(ー)ー)m

ではまた次回!

by天翔る堕天使より。

第000・7話 これからの主人公の能力説明（前書き）

どうも、天翔る墮天使です。

今はマジですいません、としか言えません。（T・T）

能力はもう二度と変えないので、許して下さい。



## 第000・7話 これからの主人公の能力説明

名前 . . . . . カク

性別 . . . . . 男性

一人称 . . . . . ワシ、くじや

容姿

【 服装 】 . . . . . 『CP9』の服装、又は『ガレーラカンパ  
ニ』の服装

【 目 】 . . . . . 黒色

【 髪 】 . . . . . オレンジ色の短髪

【 身長 】 . . . . . 180センチ

【 体重 】 . . . . . 70キロ

【 年齢 】 . . . . . 23歳

く新しい能力く

六式  
ろくしき

CP9が体得している6種類の超人的体技。長い訓練を重ね全身を武器とする。6種類すべてを体得した者を「六式使い」と呼ぶ。

指銃<sup>シガン</sup> . . . . . 指で敵の体を撃ち抜く。技のバリエーションは「一  
転集中」という点は共通するが、必ずしも「指から」とは限らない。  
基本的に鉄塊が習得できていないと使用不可能。

嵐脚<sup>ランキヤク</sup> . . . . . 蹴りで呼び起こす鎌風。

剃<sup>ソル</sup> . . . . . 瞬発的に加速し、消えたように移動する移動技。

鉄塊テツカイ・・・肉体の硬度を鉄の甲殻にまで高める防御技。但し鉄を砕く程の強度を防ぐ事は不可能。

月歩ゲツボウ・・・爆発的な脚力で空を蹴って宙に浮く回避技。

紙絵カミエ・・・敵の攻撃を紙の如くヒラヒラと避ける回避技。

六王銃ロクオウガン・・・六式を極限まで高めた者が使える六式。

生命帰還せいめいきかん・・・意識を身体のあらゆる所に張り巡らせ、操る技。

く詳しい技く

ロブルツチ

動物系悪魔の実「ネコネコの実 モデル”豹”」レオハルト

技一覧

六式

指銃「黄蓮」オウレン・・・片手で連射する指銃。

剃刀カミソリ・・・鋭い軌道で空を走る、剃・月歩の複合技。

\*嵐脚「豹尾」ヒョウビ・・・豹形態で放つ螺旋を描いて飛ぶ嵐脚。

鉄塊「空木」うつぎ・・・鉄塊によるカウンター。常人ならば拳が割れる。

\* 飛ぶ指銃「撥」バチ . . . . 豹形態で、鋭い人差し指の爪の先から空気の塊を弾き飛ばす。

\* 飛ぶ指銃「三撥」ミツバチ . . . . アニメオリジナル。撥の3連射。

\* 飛ぶ指銃「火撥」ヒバチ . . . . アニメオリジナル。人差し指の爪の先に発生させた炎の塊を弾き飛ばす。

嵐脚「凱鳥」ガイチヨウ . . . . 羽を広げた鳥の様な嵐脚で鉄の外版に切れ込みを入れる。

指銃「斑」マダラ . . . . 両手で連射する指銃。

六王銃ロクオウガン . . . . 六式を極限以上に極めた者が使える六式最終奥義。両手の握り拳を相手に構えて衝撃を送り込む。

\* 最大輪さいだいらん「六・王・銃」ろくおうがん . . . . 生命帰還を解除し、相手が逃げられないように尻尾で掴みフルパワーで放つ六王銃。

\* 生命帰還 . . . . 紙絵武身カミエフシ生命帰還の一種で筋肉を収縮することでパワーを落とす代わりにスピードを上げる。

カク

動物系悪魔の実「ウシウシの実 モデル”麒麟”キリン」

技一覧

六式

嵐脚「白雷」はくらい . . . . 上方から撃ち落とす嵐脚。

嵐脚「乱」らん・・・嵐脚の乱れ撃ち。

\*嵐脚「周断」あまねだち・・・キリン形態によるリーチ・重量増大、そしてこれによる遠心力を利用して放つ最強の嵐脚。

嵐脚「線」せん・・・一直線に走る嵐脚。

\*鼻銃ヒガン・・・キリン形態の鼻で放つ指銃。岩に穴を開けるほどの威力がある。

\*極・鼻銃「麒麟マン射櫓（キリマンジャロ）」・・・首を縮めた「キリン砲台」から撃ち出す究極の鼻銃。

\*鉄塊「無死角」ムシカク・・・鉄塊状態で体を折りたたんで四角にする。

\*嵐脚「麒麟時雨」キリシぐれ・・・嵐脚を天井に向かって乱れ撃ちし、天井から跳ね返ってきた斬撃の礫を降らせる。斬撃は自分にも降りかかるが鉄塊で防ぐ。

\*嵐脚「龍断」ロウダン・・・両足で縦に放つ嵐脚。

\*嵐脚「ネジ白刃」ネジはくじん・・・体を回転させながら放つ嵐脚。

嵐脚手裏剣・・・手裏剣状の嵐脚を乱れ撃つ技。

\*鎌麒麟・・・キリン形態の首で相手をなぎ払う。

\*パスタマシン・・・首を縮めすぎると何故か手足が伸びてし

まったことで命名。邪魔な首を仕舞い手足のリーチが長くなる利点がある。

\* 鞭竹林へんちきりん・・・首を鞭のように相手に叩きつける連続攻撃。

\* 猛竹林もうちきりん・・・鼻銃の連続攻撃。

\* 逆鱗げきりん・・・嵐脚・二刀を使った四刀攻撃。

## ジャブラ

動物系悪魔の実「イヌイヌの実 モデル”狼”ウルフ」

六式使いで唯一、全身鉄塊状態で動く事ができ、それを利用した「鉄塊拳法」を駆使する。

## 技一覧

### 六式

十指銃ジュッシガン・・・両手の付け根を合わせて攻撃する十本の指による

### 指銃。

月光十指銃ゲツコウジュッシガン・・・月歩で勢いをつけた十指銃。

\* 嵐脚「孤狼」ころう・・・波の様に跳ねていく嵐脚。

\* 嵐脚「群狼連星」ルンバスフォル・・・4つの狼の形をした嵐脚を放つ。

### 鉄塊拳法てっかいけんぽう

\* 狼弾オオカミハジキ・・・鉄塊をかけた両腕で敵を弾き飛ばす。

\* 狼牙ろうがの構え。 . . . 鉄塊をかけた防御技での構え。

\* 狼芭ろうばの構え。 . . . 腰を落とした状態で両手をついて、体を浮かせた構え。

\* 狼狩ろうかうエリア・ネットワーク。 . . . 狼芭の構えから四方八方から浴びせる斬撃。

\* 重歩ドン・ポー・ロウ狼。 . . . 鉄塊をかけた手で放つ強力なパンチ。

\* 魔天マテンロウ狼。 . . . 鉄塊をかけた両足で敵を蹴り上げる。

## ブルーノ

超人系悪魔の実「ドアドアの実」  
六式

鉄塊「輪りん」。 . . . 鉄塊状態で両足を一直線に伸ばし、側転のように、回転しながら攻撃する。

鉄塊「碎さい」。 . . . 鉄塊状態で相手を殴りつける。

鉄塊「剛こう」。 . . . 最強強度の鉄塊。

ドアドア。 . . . 壁などの触れた物にドアを作る。閉じると元に戻る。

空気開扉エアドア。 . . . ドアドアの実の真骨頂。大気の壁にドアを作り出し自由に移動ができる。

回転ドア・・・触れたものに回転ドアを作る。ドアドア同様閉めると元通りになる。

フクロウ

技一覧

六式

六式遊戯「手合」てあわせ・・・相手の体技の強さを攻撃を受けることによって測る能力。

獣敵ジュゴン・・・指銃の速度で打ち抜く超重量パンチ。

「獣敵」フクロ奥義鼻叩き・・・獣敵の連打。

鉄塊玉テツカイダマ・・・鉄塊状態、かつ剃の速度で高速回転して相手に突っ込む。

紙絵「軟泥」スライム・・・体をスライムの様に変形させて攻撃を避ける。

今回はクマドリとカリファの能力は無しの方向で行かせてもらいます。

【\*】このマークはその悪魔の実を使用中にならできます。見た目はカクですが、ルツチャジャブラの悪魔の実使用中はルツチャジャブラが悪魔の実を使っている姿っぽくなります。もちろんカクもそうです。

く魔法剣とエルザの能力っばいやっく

『魔法剣』と言っても、カクがゾロと戦っていた時の普通の刀。但し、自分の身体の大きさに合わせて、刀も大きくなる。

『エルザの能力っばいやっ』とは、ただ単に自分の服装を変えるだけで、『能力付きの鎧』とかにはならない。ただの『服装が変わる』程度。



第000・7話 これからの主人公の能力説明（後書き）

何だか、膝が痛いので温めながらねます。

皆さんも体調管理には気を付けて下さい。

ではまた次回！

b y天翔る墮天使より。

第000・8話 時は過ぎて 原作突入1週間前 (前書き)

どうも天翔る堕天使です。

最近iPhoneのメモ帳に下書きをしていたら、メモ帳の中身のデータが吹っ飛びました。(笑)

あの時はショックのあまり、全力投球でiPhoneベツトに投げ込みました。(´・`)(y・

そんなこんなで始まります。

## 第000・8話 時は過ぎて 原作突入1週間前

Side カク

どうもこんにちは、フェアリーテイルのギルドに所属しているカクじゃ。今は原作突入の約1週間前になって、ワシは23歳になった頃じゃ。

この間に合った出来事を簡単に分かりやすく箇条書きで説明をしていこう。

1・S級魔導士になった。

\*理由は特に無し。

2・ミラの妹、リサーナがエドラスに飛ばされた。

\*止める理由は無く、原作に沿っていく為。

3・ミラと付き合ってる。

\*決定事項。

4・ギルターツにあの薬を渡した。

\*原作で酷い怪我した筈だから。

5・異名を幾つか貰った。

\*【山風】やまかぜ【嵐】あらしこれは、『正規の人達』によく言われる。理由としてはよく走り回っているからじゃと思う。

\*【妖精化物】フェアリーモンスター【動物化物】アニマルモンスターは『闇ギルドの関係者』によく言われている。悪魔の実でや六式、ベクトル操作で暴れてるからみたいじゃ。

ワシが依頼を終えて森の中にある一本道を通ってギルドに帰っていると、目の前から荷台を引いてる3人組が目に入った。一見すると特に変わった所は特に無いただの商人だが、1人がワシに気付いたのか前にいる2人に話し掛けている。

ワシは見聞色の覇気で、何気なく荷台に積まれている荷物を確かめてみると、荷物の中から数人だが人の気配がした。恐らく盗賊か何かの類じゃろう。

カク

「その商人さん。道を聞きたいんじゃないかと良いかの？」

商人A

「悪いが俺らはここら辺には住んでいないから、あまり知らないんだよ。すまん。」

あくまでも奴等には知らないフリをして荷台にいる人達に危害が加わらないようにする為なるべく『敵意』を与えないつもりじゃったが。

カク

「そうじゃったか、急に話し掛けてすまんの。しかし、荷台に人を入れて運ぶのはなかなか出来る事では無いんじゃないのか？」

商人A

「な、何の事でしょうか？」

商人B

「おい、やれ。」ボソッ

カク

「何をやるつもりなんじゃ？」スッ

商人A & B & C

「「「「！」「」」」」

ワシは剃<sup>ソル</sup>で瞬発的に加速して消えたように移動し、商人Bと商人Cの首筋に刀を突きつけた。

商人Cは既に右手に魔法剣を出していたので明らかに怪しい。仮に『やましい事』が無いのであれば抵抗はしない筈だが。

商人B

「べ、別に俺らは何もしてないぞ！」

商人C

「た、ただ単に荷物を運んでいるだけだ！」

カク

「本当の事を言っと？」ギロツ！

商人A

「盗みました！」

ワシは取り敢えず、嘘をついた商人B & Cの首を刎ねて絶命させた。次に怖気付いている商人Aに、刀を向けて『何処から盗んだ』のか聞くと恐怖で慌てている。

仕方がなく刀を仕舞い、男の髪の毛を掴み上げて無理矢理立たせ商人Aに再度聞いてみた。

カク

「10秒以内で『何処から盗んだ』か答えるんじゃ。10・・・9・・・

・8・7・6・5・4「お、俺達が来た道を1キロ程も、戻った所の街からです！」・・・わかった。指銃シガン！」ドスツ！

商人A

「な・なん・・・で・・・。」ドサツ

カク

「ワシは別に『助けてくれ。』と言われた覚えはないぞ？さて、取り敢えずは荷台にいる人を起こすかの・・・こいつ等を片付けてから。」

ワシはひとまず3人を道の見えない所に隠して荷台にいる人を起こした。どうやらガスか何かで眠らされており、目立った怪我はしていなかった。

その後ワシは荷台にいた数人に事情を話して、街まで案内をして貰い彼らの街に着いた。そして同時にワシは逃げた。何故って？

街の皆が荷台にいる人達を見たら、鬼の形相で駆け寄って来たからじゃ。ワシは当然、剃ソルと月歩ゲッポウを使いその場からダツシユでギルドの方へ逃げ去った。因みに月歩ゲッポウとは爆発的な脚力で空を蹴って宙に浮く回避技である。

カク

「ここまで離ればもう来ないじゃろ・・・んっ？あの後ろ姿は・・・ミストガンかの？・・・よっ。ミストガン最近の『アレ』の方はどうじゃ？」

ミストガン

「カクか、久し振りだな。『アレ』はまあまあだよ。数は前より少ないけど少しずつ大きくなって来ている。」

今ワシと話している男が『ミストガン』又の名を『エドラス版ジエラール』。だいぶ前に仕事先で出会った時には『アレ』を塞いでいる時だったのでかなり気まずい雰囲気だった。

その結果出た結論が『この事は秘密にする』という普通の結果だった。因みにミストガンは『妖精の尻尾最強の男候補』フェアリーテイルでもあるらしい。

カク

「そうか。そういえば薬の方は大丈夫か？また補充でもするかの？」

ミストガン

「いや、まだ大丈夫だろう。『大きくなった』と言ってもそんなに立て続けには無いし、塞げれるから平気だ。」

カク

「そうか・・・ではまた、機会があれば会おうかの。」ニコッ

ミストガン

「フッ、そうだな。またいずれ会おう。」

ワシはミストガンにそう言うと、互いに反対方向に進んで行った。ワシはギルドなは向かい、ミストガンは依頼をこなすか『アレ』を塞ぎに行った。

Side Out カク

**第000・8話 時は過ぎて 原作突入1週間前 (後書き)**

今回はだいぶ短い話でしたが、次回も短いと思います。

そろそろ大晦日が近づいて来たので、皆さん羽目を外さないよう気を付けて下さい。

ではまた次回。

by天翔る堕天使より。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4563z/>

---

FAIRY TAIL ~妖精の化物《フェアリーオブモンスター》~

2011年12月28日23時54分発行